

---

# **メガネの魔法 1 ~始まりの公園~**

シマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メガネの魔法 1 ～始まりの公園～

### 【Zコード】

Z5848P

### 【作者名】

シマ

### 【あらすじ】

彼氏いない歴=自分の年齢。そんな恋に奥手の私。ロマンチックな出逢いに憧れるけど……メガネっ子にそんな出逢いがある訳もなぐ。気分転換に出掛けた公園で犬に飛び付かれて……

「ああ、こんなに良い天気なのに……虚しいな」

私、遠藤裕美（えんどうゆみ）は、二十歳にして、未だに彼氏がない。初対面の男性と話をするのが苦手で出逢いはなく。せっかくの休日も、友達は彼とデートで遊んではくれない。気分転換に公園を散歩して、そのままベンチで本を読んでいたが……。回りはカップルや、家族連れがほとんどで、一人の自分はかなり浮いていた。

（明日は仕事だし、帰つてゆっくりお風呂に入らう）

虚しいため息を吐きながら立ち上がりかけた時、犬の鳴き声がすぐ側で聞こえた。

「えつ？……うわー！」

氣付いた時には手遅れ。犬は私めがけて飛び付いた。中途半端な姿勢だった私は、見事に犬と一緒に地面にぶつかり、かけていたメガネが飛ばされた。

「なつ！何！？ワンちゃん、落ち着いて～」

顔を舐められてベトベトの上に、地面に倒れたせいで腕と背中が痛かった。

「大丈夫ですか！？すいません、うちの犬が」

## バキヤ

飼い主さんらしい人の声と、信じられない音が聞こえて血の気が引いた。

「あああ！…メガネ！私のメガネは！？」

「すいませ……ん。私が踏んでしまって……」

犬を押さえながら言つた飼い主さんの一言に、私は目の前が真っ暗になつた気がした。

私の視力は、半端なく悪い。

乱視が強くて、お店にレンズの在庫はなく何時も取り寄せの特注品だ。

(嘘でしょ！……予備はあるけど……どうやって家まで帰る？)

メガネがなくては、真つ直ぐに歩く事すら出来ない。途方にくれて動かない私の腕を飼い主さんが引き上げて、立たさせてくれた。

「メガネは弁償しますから、今からでも買いに行きましょう」

「ああ、いえ多分この近くじゃ売つてませんから良いです」

「売つてない？」

飼い主さんの怪訝な声に慌てて説明を付け加えた。

「私、極端に視力が悪くて、レンズは大概取り寄せなんです。家に予備がありますから気にしないで下さー」

「じゃあ今も見えてないの?」

笑つて誤魔化しながら服に付いた土を払い落とすと、足元に座る犬の頭を撫でた。

「次は、飛び付いちやダメよ。ね? ワンちゃん」

わん!

承諾の様な元気な鳴き声を聞いて、私は思わず声を上げて笑つた。飼い主さんは、何故か黙つたままで、でも帰るには丁度いいかも。

「それじゃ、失礼します」

ペコりと頭を下げて歩きだした私は、腕を捕まれ転びそうになつた。振り向くと、飼い主さんが右手がしつかり握つている。

「あの……放して下せー」

「車で来てますから、せめて家まで送ります」

「車……いえ、泥だらけだし汚すといけないので止めておきます」

メガネのない私には飼い主さんの表情処か、ただののっぺらぼう。返事もなくて困つて首を傾げたら、飼い主さんが顔を近付けてきた。

「もしかして、私の顔が見えてないのか?」

「あの……」

先ほどより強くなる口調に身体が強ばる。誤魔化せないと諦めて、私は素直に頷いた。

「それなら、なおさら家まで送ります。つこてきて下さい」

飼い主さんは壊れたメガネを拾うと、私の腕を引き何処かへ歩き出した。景色も道の様子もボヤける私は、素直について行く以外出来なかつた。

駐車場に着き乗るような言われた車は、黒い軽自動車。小さなスポーツカータイプの車に、私は興味津々で見ていたら、後ろから笑い声が聞こえた。

「珍しいですか?」

「あついや……私、車が好きなんです。見ると興奮しちゃって……」

「へえ……来週からクラシックカーのイベントがあるの知っていますか?」

「そりなんですか!…どいで!」

興奮しすぎて大きな声になり、また笑われた私は肩を萎めて俯いた。

(また、やつてしまつた……あれ?でも、メガネがないせいかな?)

初対面なのに緊張しないで話せる）

「お詫びも兼ねて、一緒に行きませんか？遠藤裕美さん」

「えっ？……名前？」

自己紹介などしていない。自分の名前を知る飼い主さんには、戸惑つていると私の目の前に顔をつきだしてきました。

「ここの位置なら分かる？」

鼻先がつきそつた距離に現れたのは、会社の上司。

仕事が出来て、知的でクール。

会社の中で結婚したい相手NO.1。

そんな人が目の前にいる事に、訳が分からなくなつた私は、目を皿の様に丸くして見詰めた。

「山崎課長……？」

「相当、悪いんだね。今頃、気付くとは」

少し呆れた様な声とは裏腹に、田はとても楽しそう。嫌な予感がした私は、逃げようと思った瞬間、再び腕を捕まれた。

「逃がさないよ。まずは、君の家を教えてもらおうか？」

一ツコロと微笑む課長は、有無を言わせない迫力があり、私は首を縦に振ることしか出来なかつた。

メガネと犬がくれた出逢いが、恋の幕開けになるのは

あと少し先のお話

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5848p/>

メガネの魔法 1 ~始まりの公園~

2011年4月16日11時59分発行